

友達との関係づくりをめぐる小学校第一学年の顕在的 カリキュラムの検討

— 生活科教科書と道徳の読み物教材の比較から —

水引 貴子¹⁾ 歌川 光一²⁾ 濱野 義貴³⁾

¹⁾ 日本児童教育専門学校

²⁾ 昭和女子大学

³⁾ 明星大学通信制大学院教育学研究科博士前期課程

Examination of Formal Curriculum in First Grade of Elementary School in the Making Relationships with Friends

— Comparing the Textbooks of Life Environment Studies with Readings of Moral Education —

Mizuhiki Takako¹⁾ Utagawa Koichi²⁾ Hamano Yoshiki³⁾

¹⁾ Japan Juvenile Education College

²⁾ Showa Women's University

³⁾ A Graduate Student, Meisei University Distance Education Graduate Course

要旨：本稿は、生活科の単元「学校と生活」の前にその授業が展開されるスタートカリキュラム中の「友達」との関係づくりにおいて、「友達」の存在をどのように伝え、またその関係づくりをどのように指導しているのか、さらに、道徳の指導内容との異同はどこにあるのかを生活科教科書と道徳の読み物教材を用いて考察する。

キーワード：友達、生活科、スタートカリキュラム、道徳

1. 問題の所在

本稿は、近年の青少年にとって切実な問題となっている¹⁾「友達」との関係づくりの教育課程上のあり方について、小学校第一学年における生活科教科書と道徳読み物教材の比較から示唆を得ようとするものである。ここで小学校第一学年に着目するのは、児童にとって、幼稚園、保育所、こども園から小学校への進学が、校種の変化による人間関係の変化の体験という点で重要だと考えるためである。

小・中学校教育において「特別の教科 道徳」は、内容項目「友情、信頼」において直接的に友達関係を扱うが、小学校低学年において友達関係に深く関

わる教科として生活科²⁾がある。生活科では、「教育課程の中で関わりを持つ級友、その中でも特に仲のよい友達、『地域の子供』として学校の教育課程外で関わる友達³⁾」といったように、多様な「友達」の存在を想定している。

本稿で着目したいのは、生活科の単元「学校と生活」(その中の最初の小単元は大抵の場合「がっこうたんけん」である)の前にその授業が展開されるスタートカリキュラム中の「友達」との関係づくりである。スタートカリキュラム自体が保幼小連携を目的としているため、その友達の扱いも小学校生活への適応が主となると予想されるが、「友達」の存在を

どのように伝え、またその関係づくりをどのように指導しているのだろうか。また、道徳の指導内容との異同はどこにあるのだろうか。

本稿では生活科教科書と道徳の読み物教材の内容の比較から、これらの課題に取り組むこととした⁴⁾。具体的には、2017年度時点で生活科の検定教科書と道徳の読み物教材の双方を発行している5社（東京書籍、学校図書、教育出版、光村図書、日本文教出版）の計10冊を対象とする⁵⁾。

2. 生活科教科書におけるスタートカリキュラムと「友達」

スタートカリキュラムとしての生活科において「友達」の意味や範囲は特に示されてはおらず、児童にとって「身近」な存在としての級友との関係づくりが重視される。

せ東書研究編では、国語で「挨拶、返事」を習得したのち、児童に「友達と遊びたい」という意識を持たせた上で、体育科、音楽科、算数科などとの合科的指導により、校庭遊び（遊具遊びや鬼ごっこ、仲間集め遊びなど）や室内遊び（手遊びや指遊び、仲間遊びなど）を行う（18頁）。その後、「友達の名前を知りたい」と動機づけた上で、国語や図工との合科的指導により「名刺交換遊び」を行う（自分の名前を鉛筆で書いたり、好きなものをクレヨンで描いたりして名刺をつくり、友達と自己紹介をし合う）（19頁）。

同書では、その他の教師の関わりとして、「教師も仲間に入って話をつなぎ、身近な友達と関わる機会を増やしていく」という休み時間の関わり、「友達といっしょに食べる楽しさを大切にしながら、給食を通して望ましい食習慣を身に付けられるように指導をする」という給食時の関わり、「整列したときの隣の児童、教室で席が隣の児童、グループでいっしょになる児童など、身近で関わりのある児童との関係づくり」という近くの友達との遊びへの配慮を挙げている（口絵4-5）。

せ学図では教科書に「ともだち いっぱい。」とタイトルづけ、「みんなは どんなおはなしを しているかな。」という問いかけを示している（10-11頁）。絵中の児童の会話には、「せんせいあのね…。」「おにいさんあのね…。」「おはよう。」「おはよう。」

「ありがとう。」とある。続く「いっしょに あそぼう。」（12-13頁）では、「みんなは なにを して あそんでいるのかな。」という問いかけがあり、絵中の児童の会話には「あっ…。だいじょうぶ。」「いっしょにあそぼう。」がある（12-13頁）。

せ学図研究編によれば、この小単元のねらいは「あいさつをしたり、自己紹介したりしながら、クラスみんなと友だちになることができる」ことである（46頁）。「クラスの中には、どんな友だちがいるかな。どんな話をしているかな。」といった誘いから、「クラスみんなと友だちになれるように、自己紹介をし合い、簡単なゲームをする。そして、感想を発表し合う。」（留意事項…自己紹介では、あいさつ、名前の紹介、出身幼稚園・保育園、好きな遊びなどを話すとともに、国語の時間にかいた「名刺カード」を活用する。名刺交換することにより、家に帰ってから、家族に新しい友だちのことを伝えられるようにする。また、体全体を使った簡単なゲームを取り入れ、緊張をほぐし、なかよくなるためのきっかけ作りとする。活動後には、学校でも家でも感想を話す場を設定し、人とかかわることができた喜び・がんばりを味わわせる。）、「新しい友だちと校庭で楽しく遊ぶ。」（留意事項…みんなですると楽しい遊びを出し合い、安全に気を付けて、遊べるようにする。）といったような展開となる（同上）。集団遊びとしては、カード集めゲーム、自己紹介ゲーム、目かくしリレーなどが例示されている（49頁）。

せ教出では、「わくわくどきどきしょうがっこう」という単元名の下に、「みんながいればぜんぶがたのしい」とあり、「みんながいれば」（作詞・作曲／タケカワユキヒデ、伴奏編曲／武田国博）の歌唱に進む（2頁）⁶⁾。

せ教出の友達関係づくりに関わる小単元「ともだちいっぱいだいさくせん」のねらいは「友達と一緒に遊んだり、活動したりする楽しさを味わうとともに、仲よくするためのマナーやルールがあることに気付く」ことにある（せ教出研究編：54頁）。その学習活動としては、「自己紹介や握手をして、友達を増やす。」「友達と一緒に仲よく遊ぶ。」「友達と一緒に歌ったり、絵を描いたりして、楽しむ。」が挙げられている（せ教出研究編：54頁）。

「仲よくするためのマナーやルール」としては、「おはよう。」や「おともだちに なってね。」といった「挨拶や、声かけを自分から積極的に行う。」（せ教出授業編：13頁）、「どうぞ。」「ありがとう。」「ごめんなさい。」「どう いたしまして。」といった「仲よくなるためには、大切な言葉があることに気付く」こと（同上：14頁）、「いっしょ にあそぼう。」「なかまに いてください。」というように「独りにならないよう、互いに声をかけ合う」こと（せ教出授業編：15頁）。

せ光村の「きょうからいちねんせい」の単元のねらいは、「クラスの友達や教師と仲良く遊ぶ活動を通して、学校でかかわる人々のことが分かり、楽しく安心して学校生活を送ることができる。」（せ光村研究編：48頁）である。

せ光村4～7頁には、歌と遊びによる導入教材「きょうからいちねんせい」が位置づけられており、歌遊びをしながら、自分のことを紹介したり、友達のことを知ったりする活動が想定されている。ソングブック収録の「すきなものななに？」の歌に合わせて遊ぶこともできるが、この紙面は歌を使わなくても活用することができ、教科書の言葉「すきなものはなに」「すきなどうぶつはなに」のように、児童が答えやすい質問から入る方法も示されている（せ光村朱書編：2頁）。

せ光村6～7頁には、大勢の児童が楽しそうに遊んでいる姿が描かれており、クラスの友達や教師との遊び、交流を深めたところで、次の単元「なかよしいっぱいだいさくせん」につなげることが企図されている（せ光村朱書編：4頁）。6～7頁に描かれている児童を、4～5頁にも登場させ、服装も同じしておくことで、探して楽しむ工夫が施されており、自分の世界をもち続けながらも、友達と交流する楽しさを味わせる意図がある（同上）。

具体的な学習活動としては、導入遊び（仲良しになれる遊び）として、「すきなものななに？」「つながったらつながった」「なかよしじゃんけん」「名刺交換」「フルーツバスケット／あおあらし」「椅子取りゲーム」「ドン・じゃんけん」「ハンカチ落とし」「手つなぎ鬼」「しっぽ取り」が挙げられている（せ光村朱書編：6～9頁）。

せ日文では、「あそんだことあるね。」「なかよくな

りたいね。」（6～7頁）という挿絵の台詞があり、このページのねらいは、「入学直後の不安な気持ちをやわらげ、安心して楽しい学校生活を送ることができるようにするために、幼稚園や保育所で経験したことのある遊びを取り入れ、新しい友だちと仲良く遊びながら人間関係をつくっていく」ことにある（せ日文朱書編：8頁）。「経験したことのある遊び」として、じゃんけん列車（留意事項…テンポのよい曲をかけてやるとよい。あくまでもBGM程度に考える。ジェンカのように、しっかり曲に合わせて行う必要はない。一つの大きな輪になるまでやると盛り上がる。）、「グーチョキパー」（留意事項…たいていどの幼稚園でも保育所でも経験しているので、喜んで活動するだろう。園によっていろいろな違いもあるだろうから、違いに気付かせるのも新たな発見があつておもしろい。）、自己紹介（留意事項…画用紙を用意して、好きな絵を描かせるのも安心してできる活動である。描いた絵を見せ合ったり交換し合ったりして、自己紹介に発展させるとよい。）、ドッジボール（留意事項…校庭でのドッジボールは、子どもの状況を見て行いたい。学級の数、学校の規模、校庭の広さを鑑みると、入学1週目では校庭での遊びは無理な場合もある。徐々に行動範囲を広げていきながら進めていくことが大切である。）が挙げられている（せ日文朱書編：9頁）。

このように、生活科のスタートカリキュラムとしての「友達」との関係づくりは、教科書中の遊びの様子からの気づきを話し合ったり、実際に馴染みのある遊びを実践した上で、名刺交換などの自己紹介や良好な関係を維持するための挨拶や言葉かけを学ぶという流れになっている。

3. 道徳の読み物教材における「友達」

続いて、2との比較のために、同発行者の道徳読み物教材における「友達」関連作品（表を参照のこと）を検討してみたい。

2015年一部改訂小学校学習指導要領道徳編の低学年の「友情、信頼」の内容は、「友達と仲よくし、助け合うこと。」である。

表：道徳の読み物教材の「友達」関連作品

発行者 (略称)	道徳読み物 教材タイトル	「友情、信頼」に関わる 読み物作品
東書	みんななかよく どうとく1	こころはっぱ
		二わの ことり
学図	かがやけみらい どうとく1ねん	ますだくんの 1ねんせい日記
		二わの ことり
		ともだちを たすけた ゾウたち
		(かがやきタイム) ともだちつくるう
		(かがやきタイム) ともだちふやそう
教出	しょうがくどうとく こころつないで1	いっしょにかえろう
光村	どうとく1ねん きみがいちばんひかる とき	しっばいしたって
		おちば
		あめふり
日文	新小学校どうとく いきるちから1	ぞうさんと おともだち
		ゆっきと やっち
		二わの ことり

したがって、関連作品は、既に友達関係にある登場人物同士の中で主人公や準主人公が、自分や相手の自己中心性への反省や戸惑いを通じて友情のあり方を考える作品（「二わのことり」（3社）「ますだくんの1ねんせい日記」「いっしょにかえろう」「しっばいしたって」「あめふり」）や、友達同士で助け合う作品（「ともだちをたすけたゾウたち」「おちば」「ぞうさんとおともだち」「ゆっきとやっち」）が多くを占め、新たに友達をつくる場面があるのは「こころはっぱ」「いっしょにかえろう」の2作品である。双方とも一人ぼっちの登場人物に声をかけることで友達になっている。

道徳の読み物教材で「友達」との関係づくりを詳細に紹介しているのは、ど学図「ともだちつくるう」「ともだちふやそう」である。

前者は、「生活科や学級活動として活用する」こと（ど学図指導書：98頁）、「交友関係を広めたい時期に、勇気を出して声をかけ合う体験をゲーム形式でさせてみる」ことを想定している。（同上：99頁）

 女兒「ともだちができないの。」
 プンブン「ともだちのつくりかた、知っているよ！」
 女兒「あっ、ブンブン、おしえて。」

（読者に向けて）

ブンブン「きみはちゃんといえているかな。」

ともだちの つくりかた ●あいさつが じょうずに できる こと 1. おはよう。 2. こんにちは。 3. さようなら。 4. ありがとう。 5. ごめんなさい。……

男児「ぼくもともだちがまだできないんだ。」

ブンブン「それじゃ、みんなでともだちづくりのれんしゅうをしてみよう。」

ブンブンのあいさつゲーム — あいさつリレー

（中略 — 引用者）

ブンブンのあいさつゲーム — めいしこうかん

（中略 — 引用者）

ブンブン「ともだちづくりのだい いっぱいはあいさつだね！ さあ、ゆうきをだして！」

男児・女兒「ブンブン、ありがとう。やってみるね！」

 （ど学図：36-37頁）

また後者は、「交友関係を深めたい時期に、休み時間や放課後を想定してことばの練習をさせる」こと（ど学図指導書：188頁）、「相手を変えて、ゲーム形式でやること」「学級活動または学級での指導で行う」ことを想定している（同上：189頁）

 男児A「いっしょにあそぶともだちがいなくてつまらない。」

ブンブン「ともだちとのやくそくのしかたをしているよ！」

男児A「あっ、ブンブン、どうするの。」

（ブンブンから読者に向けて）

あいさつの ときのように
 ゆうきを だして
 ともだちに こえを かけよう。
 「あそぼう！」「いれて！」
 「いっしょに あそぼう！」
 「きょう、あそべる？」 など。

(欄外の注意事項)

★ともだちの かおを みる。

★きこえる こえで いう。

★えがおで いう。

男児 A 「いっしょにあそぼう！」

男児 B 「うん、いいよ。」

男児 A 「きょう、あそべる？」

男児 B 「だめだよ。」

男児 A 「ことわられてかなしいよ。」

男児 B 「どうしよう。」

ブンブン 「じょうずな ことわりかたを しているよ。」

男児 B 「ブンブン。どう するの。」

(ブンブンから読者に向けて)

きもちの よい ことわりかた
 1. まず、あやまろう。
 2. ことわる りゆう をいおう。
 3. かわりの ことを いおう。
 「ごめんね。きょうは、〇〇が あるから、あそべないんだ。あしたなら あそべるよ。」

(欄外の注意事項)

★ともだちの かおを みる。

★きこえる こえで いう。

★さいごまで いう。

男児 A 「きょう、あそべる？」

男児 B 「ごめんね。きょうはようじが あるから、あそべないんだ。あした あそぼうよ。」

男児 A 「じゃあ、あしたあそぼうね。」

男児 B 「うん、たのしみだね。」

(ど学図：92-93頁)

特に後者は、友達誘いの「ことわりかた」について触れている点で、友達と「仲よくする」設定で貫かれている道徳の読み物教材としてはハウツーの要素が強いものとなっている。

4. まとめと今後の課題

本稿では、①生活科のスタートカリキュラムとしての「友達」との関係づくりは、教科書中の遊びの様子からの気づきを話し合ったり、実際に馴染みのある遊びを実践した上で、名刺交換などの自己紹介や良好な関係を維持するための挨拶や言葉がけを学ぶという流れになっている、②道徳の読み物教材では、「友情、信頼」に準拠した作品は、友情の深め方の考察が主であり、友達との日常的な関係づくりの要素は弱い、といった点を明らかにした。

生活科、道徳双方の教材に共通しているのは、なぜ「友達」が必要なのかという論点が不在であることや、誰かと親密な友達になることで自然と生じる排他性が反省事項としてのみ挙げられるといった点である。

ただし、道徳の読み物教材では「友情」を扱うため、登場する「友達」が学校内外双方であるのに対し、生活科では友達との関係づくりがスタートカリキュラムとして、なおかつ「がっこうたんけん」の前段階の単元として位置づいているため、「友達」の対象やその関係づくりの方法・手段はむしろ明確になっている。この、スタートカリキュラムが有している「学校における友達づくりの意義はまずは当人の学校生活を円滑にすることにある」という視点は、友達関係のグループ化によって「友達＝級友」という図式の固定化していく傾向にある小学校中学年以上⁷⁾の教育課程にとっては、示唆を与える可能性もあるだろう。

本稿では、生活科における「友達」関係づくりの中でも、スタートカリキュラムのみへの着目となったが、低学年全体を通した検討や道徳の読み物教材との比較については別稿に期すこととしたい。

〈注〉

1) 鈴木翔 (2015) 「友だち — 「友だち地獄」が生まれたわけ —」 本田由紀編著『現代社会論 — 社会学で探る私たちの生き方』有斐閣、pp.79-101、岡邑衛・歌川光一 (2018)

「高校生のコミュニケーション能力を育む学級集団に関する一考察—特別活動が目指す「望ましい集団活動」を視野に入れて—」『甲子園大学紀要』vol.45、pp.1-5.

2) 生活科は1989年3月15日に告示された小学校学習指導要領において、第一学年及び第二学年での理科と社会科に代わる新科目として新設された。1992年から全面实施されている。生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通じて、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において、自立への基礎を養う」とある。

生活科成立の背景として、1987年12月の教育課程審議会「答申」の高橋による要約を紹介すると、以下のようになる（高橋一男（1990）「生活科の成立過程とその内容」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』22号、p.1）

1. 低学年児童の活動と思考の未分化
2. 幼稚園及び保育所と小学校のスムーズな接続への期待
3. 児童の自然離れや生活習慣の不足
4. 理科や社会科での表面的な知識の伝達への危惧
5. 理科や社会科における指導の困難さ

この「答申」以前から、合科的指導の必要性は昭和50年代の答申にも盛り込まれており、1976年には研究開発学校が発足したことで、ここでの実証的な研究が生活科誕生に貢献している（小島文英（2002）「ミャンマーの児童中心主義と合科的指導の採択にまつわる課題—日本における社会科および生活科の成立過程との対比において」『国際基督教大学学報、I-A、教育研究』44号、pp.43-55）。

3) 水引貴子・歌川光一（2017）「「友達」をめぐる保育内容（人間関係）と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題—2017年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領の検討を中心に—」『敬心・研究ジャーナル』1（2）、p.137.

4) スタートカリキュラムにおける友達との関係づくりは、「ともだち」と行うこととなる「がっこうたんけん」の円滑な導入のあり方にも関わる（櫻井恵子（2012）「アーティキュレーションの段差をなだらかにするスタートカリキュラム研究—生活科「学校探検」における、合科的な指導による円滑な接続を目的として—」『教材学研究』第23巻、pp.109-118）。

5) したがって、生活科教科書は2008年改訂学習指導要領に、道徳の読み物教材は2015年一部改訂学習指導要領に準拠している。以下、これらの教科書を引用する際は、「東書」「学図」「教出」「光村」「日文」とし、生活科については「せ東書」、道徳については「ど東書」のように略記する。さらに、その教師用指導書を参照する際には「せ東書

〇〇編」のように略記する。これらに対応する引用資料については本稿末尾を参照されたい。なお、生活科教科書と道徳の関連について扱った研究として、大橋保明（2011）「生活科教科書における道徳の内容項目に関する研究」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』（9）、pp.49-57、生活科教科書や指導書における幼児教育について扱った研究として、福元真由美（2018）「生活科教科書の教師用指導書における幼児教育に関する記述の変遷：幼児教育と小学校教育の接続を図る観点に注目して」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』69（1）、pp.129-139、がある。

6) その歌詞の一番は以下である。

みんながいればごはんたべるのもたのしい
 とりのひととあいさつするのもたのしい
 はなのかおりやとりのさえずり
 ぜんぶがたのしい
 ちきゅうのうえにうまれたことがたのしい

（せ教出なかよしソング：4-7）

7) 歌川光一・岡邑衛（2017）「小中学校における「友達」をめぐる顕在的カリキュラムの検討：道徳の読み物教材に描かれる友情」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』（3）、pp.75-84

【引用・参考文献】

<生活科教科書関連>

『新編あたらしいせいかつ上教師用指導書』（指導編、研究編、資料編、活動事例編）、2015年

『みんなと学ぶ小学校生活上教師用指導書』（朱書編、研究編）学校図書、2015年

『せいかつ上みんななかよし教師用指導書』（授業編、研究編、地域事例編、なかよしソング）教育出版、2015年

『せいかつ上みんなだいすき学習指導書』（研究編、朱書編、せいかつソングブック）光村図書出版

『わたしとせいかつ上みんななかよし教師用指導書』（研究・資料編、朱書編、地域実践事例集）日本文教出版、2015年

<道徳の読み物教材関連>

『道徳』編集委員会編『道徳：小学校：教師用指導書1』東京書籍、2015年

松尾直博ほか著『かがやけみらい道徳1年教師用指導書』学校図書、2015年

光村図書出版株式会社著『どうとく1ねんきみがいちばんひかるとき：教師用指導書』光村図書出版、2013年

受付日：2018年4月16日